
台風 23 号・バス水没事故—そこに看護師たちがいた

(小島唯美・小林豊子、訪問看護と介護 10: 132-140, 2005)

2018 年 1 月 12 日 災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

今回課題となった論文は、2004 年 10 月 13 日に発生した台風 23 号の被害に遭われた方々の体験談と、その際に元看護師たちがとった行動についてというテーマであった。以下に、この論文についてまとめる。なお、本論文は 2005 年に書かれたものであり、このレポートもそれに準じたものとする。

2004 年 10 月 13 日に発生した台風 23 号は、超大型の台風であり、日本各地に大きな被害をもたらした。著者の小島唯美さんも、その被害に遭われた一人である。小島さんは旅行から観光バスで帰路についていた際に被害に遭った。その後、約 10 時間嵐の中を耐え抜き、バスにいた乗客全員が無事生還した。この約 10 時間の中には、観光バスに乗っていた乗客全員の助け合いがあった。

観光バスの乗客は 37 名で、うち 9 名が元看護師であった。まず、小島さんら元看護師の方々が行ったことは乗客全員の心を落ち着かせることであった。とにかくパニック状態だけは防がないと、それぞれが勝手な行動をしてしまう危険性があったためである。次に身の回りにあるもので、様々な問題に対する対処を行った。バスは台風の被害によって浸水しており、ロープか何かで固定しなくては足場が不安定になってしまう。小島さんらはバスにあったカーテンを結び、木に括り付けバスを固定した。中には過換気症候群を起こしかけている方もおり、本来ビニール袋をかぶせて息をさせるのだが、バスの上にビニール袋はなく、呼吸を整えさせるために深呼吸をさせていた。最後に、それぞれが励まし合いを行った。比較的元気な男性は、雨風を避けるための壁になり、女性や体の弱い人を守っていた。みんなで歌を歌い、体を動かすことで気力を途切れさせることなく、救助が来るまで雨風を耐え続けた。その後約 10 時間後、救助が到着し小島さんらは無事生還したのである。

今回の論文で、小島さんらが無事生還できた要因として、以下の 3 つのことが考えられる。①災害時にその場にいる全員をまとめるリーダーの存在、②物がなくても、その場にあるもので代用する応用力、③その場にいる人全員の協力、である。①は、全体をまとめなければそれぞれが勝手な行動をとってしまう、全体の把握ができないためである。②は、物資が少ない災害現場において、何かで代用できるということは、それだけその場においてできることが多くなっていくということである。本論文の中でも豊岡病院の原田玻璃美看護部長が、40 年前の設備の整っていなかった時代の看護の現場を小島さんたちは経験しており、この経験が今回の災害において生きたのではないかと語っている。③は、小島さんたちの経験の中で最も大きな要因ではないかと考える。①のような、全体をまとめ上げるリーダーの存在は確かに大きい。しかし、リーダー一人だけが動くのではいずれ破たんしてしまう。小島さんの場合でも、雨風をしのぐために全員が一つに集まり、身を寄せ合っていた。体を少しでも冷やさないために、全員で歌を歌ったり、体を動かしていたりしていた。その場にいる全員が一丸となって互いに助け合うことこそが、災害医療において最も重要なことではないかと考える。